

慰霊祭準備

「令和 7 年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の斎行日時については、令和 6 年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭終了直後の令和 6 年 7 月 6 日、靖國

神社と調整した結果令和 7 年 7 月 5 日（土）に斎行することに決した。
なお、令和 7 年度の合同慰霊祭は終戦 80 年の節目であることから、諸物価の高騰等による大幅な支出増加が見込



安倍昭恵会長祭文奏上

れたが、直会を含んで斎行することによって準備を開始した。

このような状況の中、当協議会理事を中心として慰霊祭参加費や実施要領の見直しについて検討を重ねた。

その結果、式典参加費を 30000 円、直会参加費をこれまでより 10000 円値上げして 60000 円とさせていた



慰霊祭当日朝の靖國神社

式典

このような中で実施された本年度の合同慰霊祭は、昨年と同様に気温がぐんぐん上昇したものの、風通しの良い靖國神社社殿は涼やかで熱中症の心配はなかった。
式典は、慰霊諸団体代表を始め、参加を希望した会員等 108 名が参列し

いた。
本年 6 月上旬、関係する慰霊諸団体及び招待者等に案内状を送付した。
参加費を値上げしての開催案内となったが、主催各団体をはじめ賛助会員等関係者の協力を得て、慰霊祭当日までに多くの参加申込をいただいた。
また、合同慰霊祭当日の天候について、以前であれば 7 月上旬は梅雨末期の集中豪雨の時期であることに留意しなければならなかったが、近年顕著になってきた地球温暖化に伴う異状気象による影響か、昨年同様今年も猛暑による熱中症が心配された。

令和 7 年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 6 5 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 1-5-7

東専堂ビル 2 階

電 話 : 03 (6380) 8943

F A X 03 (6380) 8952

<https://ireikyou.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 國澤輝生

発行人 國澤輝生

印刷所 (株)SG初スホールディングス

目 次

令和 7 年度合同慰霊祭斎行	1
あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰める (第十六回)	5
硫黄島における遺骨収集を体験して	10
曾祖父 笠井千秋さまへ	13
事務局からの報告等	15
靖國カレンダーの紹介	16



式典に臨む慰霊諸団体代表等



参列者全員による国歌斉唱 (1)



世田谷男声カルテット「ガバーガバ」による献歌

正午に開始された。神職の司会でトランペットの伴奏（堀田和夫氏・町ともみ氏）により全員起立して国歌を斉唱した後、神職による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が進められた。

祝詞においては、慰霊諸団体合同主催の趣旨に鑑み、夫々の団体の戦没者への思いを込めて、当協議会参加慰霊47団体の団体名が奏上された。

次いで安倍昭恵協議会会長が協議会参加諸団体を代表して次掲の祭文を奏上し、今後も慰霊諸団体と連携し戦没者慰霊の永続に努力することを誓った。

なお、本慰霊祭に際し、靖國神社での慰霊祭には出向けないが、在宅のまま靖國神社に向かい参拝したいとの申し出と共に玉串料をお寄せいただいた「在宅参拝者」が今年も国内外合わせて1000名を数えた。

本年も参列者と在宅参拝者を合わせた208名と参加・協力をいただいた7団体が記載された「参拝者名簿」を祭文と共に神前に奉納した。

次いで奉納演奏が行われた。

まず、世田谷男声カルテット「ガバーガバ」の皆様による「椰子の実」、「希望（のぞみ）の島」2曲の歌が奉唱され、美しい男声4重唱のハーモニーが御霊に届けられた。

次に参拝者一同で雄々しく戦場に散つて逝かれた戦没者に思いを馳せつつ、「同期の桜」と「海ゆかば」をトランペットの伴奏で斉唱、歌声は神苑にこ



参列者全員による国歌斉唱 (2)

だました。

その後参列者一同はご本殿に昇殿参拝、慰霊団体代表の玉串奉奠に合わせて拝礼した後、「国の鎮め」のトランペット演奏の中、しばしの黙とうで戦没者慰霊の誠を捧げた。

直会

式典を終えて、参拝者一同靖國會館に移動し、2階の会場「九段・玉垣・田安の間」において1330からご来賓、参加各団体代表、賛助会員、JYMA学生等81名が参加して直会が執り行われた。

直会は、当協議会伊藤専務理事の司会により進められた。

直会の開始に先立ち、この度の式典及び直会を支援いただいたトランペット奏者（堀田氏・町氏）及び世田谷男声カルテット「ガバーガバ」の皆様、次いで慰霊祭の準備段階から支援をいただいたJYMA日本青年遺骨収集団の学生諸氏を紹介し、感謝の意を表した。

最初に、当協議会を代表して安倍昭恵会長が挨拶に立ち、本日の式典が滞りなく厳粛かつ盛会裡に終了できたこと、斎行に当たり参加各団体から絶大なご支援・ご協力をいただいたことに対し感謝の意を表するとともに、今後とも戦没者慰霊事業の永続のためご支援賜りたい旨の挨拶が述べられた。

次に、ご来賓を代表して靖國神社村田信昌権宮司から靖國神社崇敬奉賛に

祭 文

令和七年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙行するにあたり、戦没者慰霊諸団体を代表して、謹んで全戦没者の御霊に慰霊の言葉を捧げます。

大東亜戦争においては、多くの皆様、祖国と同胞の安寧を願い、アジアの解放と繁栄を実現すべく、北は酷寒不毛、南は酷暑瘴癘、人跡未踏の密林などの各地へ赴き、勇戦敢闘されましたが、この間において二百三十数万、余柱に及ぶ将兵の皆様が、幽明境を異にされました。

故郷の美しい風景や愛しいご家族との楽しい日々に残しつつ散華された皆様方のご無念と、無事のご帰還を心待ちになさっていらつしやうたご遺族の悲痛に思いを致す時、今なお万感胸に迫るものがあります。

今日の我が国の繁栄、そして国民が享受する豊かで平和な生活と、アジア諸国の独立と発展は、皆様方の献身が礎石となつて築かれたものであることを忘れる訳には参りません。

しかしながら、先の大戦終結後、平和と繁栄が続いた今日、皆様とともに戦い、そして戦後我々を導いてくださった戦友の方々も年々鬼籍に入られる中で戦没者に対する国民の慰霊と感謝の思い、先人が遺された我が国古来の伝統的美徳が風化しつつあることが憂慮

されております。

私も大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会は、戦没者慰霊諸団体と相携えて、戦没者慰霊事業の永続と、それを通じての国民道義の作興に寄与することを目的として日々活動しております。

あの夏の暑い日から八十年を迎えようとする今こそ、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれた全戦没者の勇気と献身を、そして生還された戦友が皆様のご加護を得て懸命に成し遂げられた戦後の奇跡の復興に思いを致し、正しい歴史と崇高な精神の継承をはかり、先人から託されたこの美しい国の平和と繁栄のために邁進すべく覚悟を新たにするものであります。

また、百十数万余柱に及ぶ未だご帰還を果たされていない戦没者のご遺骨のご帰還についても、遺骨収集事業に携わる組織の一員として、お一人でも多くの方々に故国にお帰りいただけるよう全力を尽くして参る所存です。

どうか私どもになお一層のご加護とお導きを賜らんことを冀つて慰霊の言葉と致します。

令和七年七月五日

戦没者慰霊諸団体を代表して
公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 安倍 昭恵



山谷えり子参議院議員による献杯



村田 権 宮 司 挨拶



安倍 会 長 挨拶



JYMA学生と安倍会長による記念撮影

各団体から寄せられている協力・支援に感謝の意が表されるとともに、本年も合同慰霊祭が斎行されたことに祝意が述べられた。

その後、本日参列の慰霊諸団体を代表して当協議会顧問の山谷えり子参議院議員が登壇され、ご挨拶を兼ねて献杯のご発声をされた。

その後の懇談会食は和やかな雰囲気の下、1時間余に及び、戦没者慰霊にかける思いが同じ者同士、戦没者への思い、お互いの慰霊活動や遺骨収集活動等を語り合い意義深い懇談の場を過ごした。

懇談会食の終盤、式典において献歌をいただいた世田谷男声カルテット「ガバーガバ」から、楽曲の披露をしていただいた。

最後はトランペット演奏に合わせ、戦没者を偲びつつ全員で「海ゆかば」を斉唱して締めくくられた。

合同慰霊主催団体

- ・公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
- (以下五十音順)
- ・公益財団法人海原会
- ・英霊にこたえる会
- ・英霊の志を継承する会(永代会員)
- ・エラブ力東京都人会
- ・岡山県郷友会
- ・鹿児島県郷友会
- ・神奈川県郷友会
- ・旧戦友連(永代会員)
- ・駆逐艦菊月会
- ・熊本偕行会
- ・熊本歩兵第225聯隊戦友会(永代会員)
- ・群馬陸修偕行会
- ・国民保護協力会(永代会員)
- ・埼玉偕行会
- ・佐賀県偕行会
- ・NPO法人JYMA日本青年遺骨収集团
- ・震洋会(永代会員)
- ・公益財団法人水交会
- ・全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会(永代会員)
- ・全国近歩一会(永代会員)
- ・全国甲飛会(永代会員)
- ・全国ソロモン会
- ・全国メレヨン会
- ・一般社団法人全ビルマ会
- ・ソ連抑留戦友・遺族会東京ヤゴダ会(永代会員)
- ・公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会

参拝者名簿

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 赤木 衛 | 上尾 秀樹 | 安倍 昭恵 |
| 荒木 文博 | 池田 縁 | 池田 遼太 |
| 石井 光政 | 井科安加里 | 市川 善浩 |
| 伊東 孝司 | 伊藤 隆 | 今村 佳太 |
| 岩浅 博之 | 岩崎 茂 | 岩撫 大毅 |
| 江成 雅子 | 遠藤 智明 | 及川 昌彦 |
| 大曾根蒼仁 | 岡田 昌幸 | 笠井るりこ |
| 笠原 優紀 | 金子 敬志 | 川崎 心優 |
| 河野 克俊 | 菊池 正通 | 北村 直昭 |
| 金田一光春 | 工藤 雅敏 | 國澤 輝生 |
| 栗田 智哉 | 黒瀬 洋 | 小原 正昭 |
| 齋藤 聡 | 齋藤 文彦 | 神原 順一 |

在宅参拝者名簿

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 青木 泰憲 | 網代 正孝 | 安藤 隆太 |
| 飯田 美絵 | 池田由紀子 | 池田 頼昭 |
| 石黒 彰洋 | 石橋 幸一 | 磯田 健一 |
| 井上 裕之 | 指宿 清秀 | 井本 尚宏 |
| 岩田 清文 | 植田 和昭 | 内田 十九 |
| 浦浪 臣晃 | 大穂 孝子 | 大穂 園井 |
| 岡部 俊哉 | 小田原健児 | 小沼 芳子 |
| 織田 邦男 | 甲斐 正人 | 加藤 三千夫 |
| 狩野 隆平 | 川田久四郎 | 川又 道弘 |

参加・協力団体

- ・中央乃木會
- ・東郷会
- ・一般財団法人全国強制抑留者協会
- ・ビルマ作戦協会
- ・ビルマ戦歩兵一六八聯隊遺族会
- ・甲飛喇叭隊
- ・群青財団

(以上合計108名)

(以上合計100名)

- | | | | | | |
|--------|--------|---------|-------|---------|--------|
| 坂下 淳子 | 笹 佳美 | 佐瀬 正博 | 菊地 珠未 | 木村 圭作 | 熊谷 國彦 |
| 佐藤 壽紀 | 佐藤 正彦 | 佐野 正博 | 久米 俊郎 | 黒木 伸男 | 腰塚 浩貴 |
| 志賀 政雄 | 清水 好 | 清水 悟 | 小島 健二 | 五反田 勇一郎 | 小長 啓一 |
| 神保 仁士 | 菅原 桃子 | 杉本 正彦 | 小林 稔 | 小林 博行 | 榊枝 宗男 |
| 杉本 順則 | 杉山 良行 | 諏訪部 さゆり | 笹路 能也 | 佐藤 勇 | 佐藤 秀幸 |
| 清 香織 | 反町 佳生 | 田井 宏幸 | 鯨嶋 明子 | 沢田 進 | 島村 宜伸 |
| 多賀 久郎 | 高根 英樹 | 武井 邦晶 | 清水 典郎 | 杉村 克治 | 精山 英人 |
| 武田 正徳 | 竹之下 和雄 | 竹本 佳徳 | 千 玄室 | 高市 晴通 | 高谷 哲郎 |
| 田中 甲 | 谷口 繁 | 津田 竜一郎 | 谷川 孝司 | 寺澤 廣一 | 多田野 弘 |
| 中井 真人 | 中川 法宏 | 中曾根 一知 | 館本 勲武 | 土肥 原保 | 内藤 壽美子 |
| 永田 美喜天 | 中村 幹生 | 行方 滋子 | 中木 村章 | 中田 高芳 | 成山 和功 |
| 二瓶 恵子 | 橋本 孝一 | 橋本 翔琳 | 西嶋 正幹 | 仁平 美香 | 野村 諦一 |
| 長谷部 拓真 | 原知 崇 | 日向 和敏 | 橋本 光彦 | 橋本 亀 | 島間 成允 |
| 火箱 芳文 | 平野 治征 | 平野 陽一郎 | 早瀬 登 | 東元 良惺 | 平松 靖 |
| 平原 颯斗 | 藤岡 勝博 | 藤原 一雅 | 弘瀬 好子 | 福代 亮介 | 藤原 淳悦 |
| 藤岡 利親 | 藤原 ふみ子 | 堀田 和夫 | 布施 不昭 | 星野 登志子 | 前田 昭一 |
| 保松 秀次郎 | 堀江 仁貴 | 堀田 ともみ | 牧 勝美 | 眞弓 英之 | 三浦 誠哉 |
| 前嶋 | 正本 禎亮 | 町 ともみ | 水野 和憲 | 水野 博文 | 宮倉 崇 |
| 松原 きよみ | 宮下 寿広 | 宮本 忠明 | 三輪 長正 | 村井 陽二 | 村川 淳一 |
| 目良 久美子 | 森本 浩吉 | 山下 美代子 | 八木 啓太 | 山口 淨秀 | 山田 大作 |
| 山崎 文夫 | 山下 輝男 | 山下 美代子 | 山田 稔 | 山本 博幸 | 山本 勝久 |
| 山田 耕一 | 山田 眞大 | 山谷 えり子 | 山本 洋 | 柚木 文夫 | 吉川 洋利 |
| 山火 葵 | 若木 利博 | 渡邊 榮二郎 | 吉田 三郎 | 吉田 滋 | 吉田 助継 |
| | | | 吉田 康浩 | 吉田 一則 | 若月 良介 |
| | | | 渡部 舟海 | | |

『あの戦争を振り返り戦没者の
霊を慰める』 第十六回

東京裁判研究者

元くらしき作陽大学教授

松元 直歳

大東亜・太平洋戦争への前奏曲(Ⅱ)

戦間期の日米中関係から開戦へ

(その11) 満州事変から大東亜・太平

洋戦へ…盧溝橋事件から日支間全面戦争へー1937(昭和12)年頃に日本が大陸で直面した困難(Ⅳ) 日本軍の南京攻略⑥いわゆる南京事件(その三)

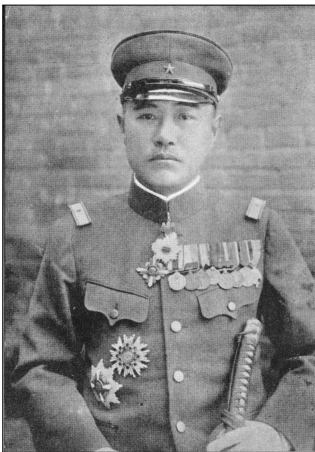
前回の第15回稿では、「盧溝橋事件から日支間全面戦争へ」の過程を見ていく中で、「1937(昭和12)年頃に日本が大陸で直面した困難(Ⅲ)日本軍の南京攻略⑤いわゆる南京事件(その二)」として、「日本軍の南京攻略」が開始される直前の、南京の状況を振り返った。その中で特に、「南京安全地帯国際委員会」の発足とその「上海租界で設立された安全地帯 ジャッキノ地帯」との比較及び南京委員会の致命的弱点を論じた。即ち、南京の安全地帯は、その創設に尽力したマイナー・ベイツ、ジョン・ラーベ、ジョージ・フィッチ、ジョン・マギー師らの意図の善良にも拘らず、その境界線が

物理的にも組織的にも極めて脆弱であって、一般大衆の「安全を確保する」点では全く不十分であり、のみならず寧ろ中国軍兵士の隠れ蓐として、その潜伏先として機能したのであった。戦争時に於けるこのような安全地帯とは、先ず以て、そこで中立的な状態の確保されるのが必須である。然しながら、その中立的な状態は上のような状況においては、確保され得なかつたのである。

さて今回第16稿では、前回に続き、いわゆる南京事件(その三)と題して、「日本軍の南京攻略」を扱うが、先ずは、日本軍がどのような組織を編成して戦ったかを見てみる。

上海派遣軍第16師団歩兵第30旅団指揮官著「佐々木到一少将私記」

本稿以下では主として、南京攻略戦を戦った日本軍部隊、即ち松井石根大將指揮下の中支那方面軍を、第10軍と共に構成した朝香宮鳩彦王中將指揮の上海派遣軍の麾下、第16師団(中島今朝吾中將指揮)にあつて、その歩兵第30旅団の指揮官であつた佐々木到一



佐々木到一少将 (Wikipedia)

少将の残した「佐々木到一少将私記」を、主として辿ることとする。しかし本稿では未だ本論には入れない。

佐々木少将の略歴を、田中秀雄著『支那通軍人・佐々木到一の足跡から読み解く 日本はいかにして中国との戦争に引きずり込まれたか』その他を参照にして記せば、以下の通りである。

佐々木は、1886(明治19)年1月27日、愛媛県松山市の佐々木透陸軍少佐の長男として生まれる。広島一中を経て、1905(明治38)年11月、陸軍士官学校を卒業するが、同期には後の山下奉文と阿南惟幾の両大將もいた。1911(明治44)年、歩兵第71連隊員として満州守備の勤務に就いた後、満州独立守備隊に転属した。同年10月に勃発した中国の辛亥革命以降、佐々木は中国への傾斜を深め、果しない戦乱と暴乱の時代に突入した大陸中国に在って、孫文は勿論、蒋介石ほかの支那人とも誼を結んだ。

先ずは、孫文による「滅萬興漢」を標榜する「辛亥革命」に、佐々木の大佐は満州において対処したが、この後佐々木は、支那への関心を一層深めた。傾倒した孫文と国民党の将来性を認め論文や著作すら発表した。

1926(昭和元)年、中佐に進級し、北京駐在の日本公使館附武官補佐官となつたが、ちなみにその前任者は板垣征四郎、後任は土肥原賢二であり、ともに東京裁判において死刑を宣告され処刑された。又上司の武官は本条繁で

あつたが、彼もまた東京裁判の戦争犯罪人として指名されたのを受けて割腹自殺した。

佐々木は、その後1928(昭和3)

年北伐を開始した蒋介石の北伐軍に、認められて従軍、同年5月発生した日本軍と国民革命軍が衝突した済南事件に際しては、両軍の使者となつて停戦の折衝に當つたが、その途次、佐々木は、支那兵に捕えられリンチを受ける。蒋介石の使いにかりうじて救出された。同時に済南事件の処理をめぐって、佐々木を見舞つた蒋介石より、日本軍の行動に対する強い不信の念を表明された。佐々木は、日本側では、支那側が責任を回避しようとするならば日本としては力に訴えるしかない」と強硬論を主張したが、支那との交渉から排除された。こうして佐々木は、日本側では、佐々木の著作とリンチされた件から、国民革命軍の肩をもちながら暴行を受けて、おめおめ生きて帰つて来た卑怯な売国奴扱いを受け、而も支那側からは、信ぜざるべき日本軍の回し者の扱いを受けるようになった。この後佐々木は、あれほど肩入れをした支那への失望から、次第に対支強硬論を唱えるようになった。

1930(昭和5)年、佐々木は大佐に進級、1932(昭和7)年、満州国軍政部顧問に就き、満州国軍の創設にかかわり、その育成に心血を注ぐ。

1937(昭和12)年12月、中支那方面軍上海派遣軍第16師団歩兵第30旅団長として南京攻略戦に参加する。そ

の後しばらく内地に勤務も、1941(昭和16)年、予備役となつて退役後、大連に住み、満洲国協和会理事を務める。

終戦も近接した1945(昭和20)年7月、第149師団長として招集され、終戦後、満洲でソ連軍に捕らわれ、シベリア抑留となる。のち中国に引き渡され、中華人民共和国の撫順戦犯管理所で、脳内出血のため死没する。享年69であった。

佐々木到一を選んだ意味

既述の通り、佐々木は、著書多く、陸軍きつての中国通と称された。且つ実際に、南京攻略戦の中心的な現場指揮官の一人として一即ち、松井石根大將指揮する中支那方面軍中の上海派遣軍(司令官朝香宮鳩彦王^{あきみ}、第16師団(中島今朝吾師団長)の歩兵第30旅団長として一これに参加した。そしてその攻略戦について、「私記」としてではあるが、指揮官自ら見たかなり克明な戦闘記録を残した。南京事件論争でも多く引用されるものでもある。

本稿では、偕行社の南京戦史編集委員会によって発行された『南京戦史資料集』に収められた『佐々木到一少将私記』他に頼る。

そもそも南京攻略戦については、実地の参加者のみならず、様々な立場の観察者による、夥しい量の記述が残されている。従つて佐々木の私記を、攻略戦の全体的・統一的な描写や見解で

あると主張することは許されない。しかしながら又、『佐々木到一少将私記』に記述された内容が、「一つ」の確かな事実・主張・見解であつたと述べることは許されるであらう。

いずれにしても、筆者の願う所は、「我々の先輩たちが歩んだ、或は歩まざるを得なかつたその現実の道」をできるだけ克明に辿るというに尽きる。端的に言えば事の善悪を問わず事実を追うということである。尤も、そもそも戦争という人間の所為に就いて余りにも単純に善悪を問うこと一戦勝国側の単純な然し殆んど常に狡猾な戦敗国への責任追及と責任転嫁、或は戦敗国側の偽善的で自己欺瞞的な贖罪意識という媚態一自体に、いったいどんな正当な意味を与え得るのか、大いなる疑問なしとはしないのであるが。

筆者の願う所が多少なりともかなえ得たならば、語弊を恐れず云えば、「いわゆる南京事件」の有無などは、戦闘としてのその重要性は十分に認めるものの、第一義的な意味をかなり弱め得るのではないか。

閑話休題―石射猪太郎『外交官の一生』は、検証されるべきである

閑話休題。

筆者はここで、資料の信頼性ということに関して、一つの具体例を紹介したい。それは主張しておきたい。それは石射猪太郎、特にその有名な著書『外交官

の一生』である。石射が、日支事変の勃発時、外務省東亜局長の枢要な地位に在つて、日支和平の結果を得んと、奮戦努力したことは認めなければならぬ。

またその経歴異色にして且つ有能であり、而も相当に反軍的な言動もあつて、戦後著した『外交官の一生』は、ある種の筋からは、然るべく人気を博しているものでもある。岡崎久彦も、『重光・東郷とその時代』の中で、石射の有能を存分に認めて称賛している。例えば石射は、廣田弘毅について、

「私には広田外相に新味も強みも感じられなかつた。ワシントン在勤時代からこの人に対して持った私の崇拜と期待は、この数年来急にさめつつあつた。

……先年広田内閣組閣の際、軍部からつけられた注文に唯々として聴従したり、軍部大臣現役制を復活したりなどした弱体ぶりに幻滅を感じたのだ。

この人が心から平和主義者であり、国際協調主義者あることに少しも疑いを持たなかつたが、軍部と右翼に抵抗力の弱い人だというのが、私の見る広田さんであつた」などと記している。又近衛文麿については、「私は近衛人氣に好意を持てなかつた。かねがね近衛公の側近者方面から漏らされた消息を総合すると、『本領のないインテリ』以上

に公を評価し得なかつたからだ……」などと評している。この二人の内閣総理大臣にかんする寸評は、賛否を別に

して、世間知を盲信しない石射の面目躍如を感じさせ得よう。

しかし敢て、筆者はここで石射の言動について、批判をしておきたいのである。筆者の理解に依れば、石射その人の一部見解の歪について口を閉ざすことは、我々の痛切な昭和前史の経験に対する悔りを黙許することであると解するからである。

例1 「中日事変」と呼ぶ元日本国外交官石射猪太郎

当該書(中公文庫2007年2月25日改定発行『外交官の一生』)の中で立てているタイトルに、「東亜局長時代―中日事変」とあり、のみならずその他各所でも「日中」ではなく、「中日」と冠している。このタイトルの付け方は、異様である。なぜなら国家間の政治、学術等の分野に於ても、何か二国間の事象について命名し、弁ずる場合、その言明の発出者の国籍が明確であるときには、彼の自国の名称を先行させることは当然のもの、自然のものとして扱われてきたからである。従つて通常、日本人がこの事変を扱うに際しては、「中日事変」ではなく、「日中事変」、「日中戦争」或は日本国側の命名した「支那事変」と称するのが常識である。まして石射は、日本国を代表する外交官であつた人物である。その彼が、「自伝」とはいえ戦後に公刊された書において、敢て「中日事変」、「中日両軍」「中日……」と称するのは、常軌を逸している、と言わねばならない。その背後には何か中国寄りの感情なり見解なりが胚胎していると

例2 盧溝橋事件勃発に「またやりあがった」

石射猪太郎『外交官の一生』294頁「中日事変の勃発」中に、以下の記載がある。

「7月8日払暁、私は外務省からの電話でたき起こされた。盧溝橋での中日両軍衝突の情報であった。

やがて登庁した広田大臣を囲んで、堀内次官、東郷欧亜局長、私の三人が鶴首した。事件不拡大、局地解決、誰にも異存あるはずがなかった。続報が次々と北平（北京・松元注）大使館から入電した。事端は中国軍の不法射撃によつて開かれたとあるが、柳条溝の手並みを知っているわれわれには『またやりあがった』であつた。が、いずれが手出しをしたかはさておいて、当面の急務は、事件の急速解決にあつた。」

然し、既に見た通り、事実は現在の主流の見解に依つても中国側のそれは別にして、日本側が「またやりあがった」のでは全くなく、支那側が仕掛けたものであつた。石射の長所を指摘する岡崎久彦も、その著『重光・東郷とその時代』のなかで、南京攻略の原因となつた盧溝橋事件に関わる石射の見解の瑕疵を指摘し忘れることは無かつた。即ち、以下の通りである。

石射にとつて、盧溝橋事件の第一印象は、「また（軍部が）やりやがった」であつた。

しかし、すでに前章で述べたように、事態は逆だつた。情勢判断でもっとも怖いのは、自分がよく知ってい

ると思つてゐる情勢が、ちよつと目を離しているあいだにいつの間にか様変わりになつてゐることである。何十年の経験を誇るプロでも、一年間情勢の変化から目をそらしてゐると、その一年情勢をフォロウしてきただけ出しの現場の人間より判断が劣ることがある。

・ ・ ・ 石射の記憶にあるのは、日本軍による挑発の脅威にはつねに脅えていたつかの間の平和の上海のイメージだつた。

しかし、現地の雰囲気は一年間で百八十度変わつてゐた。戦争、つまり抗日戦争の勃発をいまかいまかと期待する雰囲気は漲つてゐたのは、むしろ支那側であつたという情勢は、現地にいた松本重治などのごく少数を除いては、日本側はだれも気づいていなかったのである。

例3 中日問題解決案…298頁

「7月18日、日曜日であるが出勤して執務していると、夕方風見書記官長から電話で呼ばれたので首相官邸に行く」と、中日問題解決案を私見でもよいから話してくれという。・・・

ここでも「中日」問題である。石射は、当時においても「日中間の紛議」を「日中間の紛議」として思考していたのであろうか。

例4 廊坊事件の帰責

《三人連れの悪魔》…303頁

「(1937年12月・松元注) 25日から翌26日にかけての廊坊事件という彼我両軍の撃ち合いで、形勢が逆転してしまつたのである。現地からの情報は、例に

よつて責を中国軍の不法射撃に帰したが、動機はわが軍末端の不必要な動きが作つたものと判断した。いずれにせよ、わが現地軍は、この事件で態度が硬化し、最後通牒を宋哲元將軍に突きつけて、29軍の保定方面への全面的撤退を要求し、容れずんば自由行動をとると通告した。満州事変以来、国防のための飼犬は、ここでも主人にお構いなしに相手に噛みつかんと猛るのだ。」

廊坊事件は、現在の日本側理解では、殆んど異論なく、支那側が仕掛けたものである。それを石射は、「動機はわが軍末端の不必要な動きが作つたものと判断した」と判定する。剩え、自己の好悪の感情に反するとしても自国軍隊を「国防のための飼犬」と吐き捨てるのである。

岡崎久彦の解説によれば（『重光・東郷とその時代』208頁「たび重なる中国側の挑発」）「盧溝橋事件直後、現地の両軍は7月11日現地協定について合意した。日本政府もいったん動員を発令しながら、事態の推移を見て、動員の実施を保留した。・・・現地では局地解決が進行していた。しかし、7月25日に廊坊で中国側による日本軍攻撃事件が起こり、26日には広安門事件が起きた。」のであつた。しかく、『外交官の一生』に於ける石射の言葉づかいには、普通の日本人であれば、不明朗と不快を覚えるを禁じえないのである。

南京攻略戦―日本軍の戦闘序列

既述の通り、北京に於ける支那側の挑発による盧溝橋事件の勃発は、上海に拡大し、1937（昭和12）年8月13日には、国民革命軍と日本軍との間の全面衝突に突入した。国民党軍の近代化に大いなる貢献をし、且つは戦略的レベル、戦闘レベルでの助言も行つたドイツ軍事顧問団の助けもあり、實際上、中国側の反日気運は最高度に高まり、物理的にも精神的にも準備が進み、対日関係において一触即発の状況を醸成した。

このような中で始まつた日中衝突は遂に、上海から支那の国都南京にまで拡大し、ここに日本軍による南京攻略戦が開始される。

さて日本軍はどのような軍の態勢で、この南京攻略戦を戦つたのであろうか？即ち、「戦闘序列」の実態である。

「軍の編成」とも云う。英語で、"order of battle" と称する。似た語義の「戦闘体制」は、"combat routine" である。この「戦闘序列」を詳述すれば、南京戦を戦つた我軍指揮官の氏名を羅列できるのであるが、ここでは、完全・詳細な図を示すスペースは無いので、割愛して概略のみを記すこととした（原則として、連隊以上のみ記す）。出典は、1989年刊『南京戦史編成表』の『南京攻略戦の戦闘序列』による。即ち、以下の通り。なお、「戦闘序列」という概念は陸軍に固有のもので海軍はこの概念を採用しない。しかし南京攻略戦には海軍も参加したので付加しておく。

中支那方面軍戦闘序列

方面軍司令官 松井石根大将 参謀長・塚田攻少将 参謀副長・武藤章大佐
上海派遣軍 司令官・朝香宮鳩彦王中将
第10軍 司令官・柳川平助中将
日本海軍 海軍航空隊 支那方面艦隊

上海派遣軍戦闘序列

司令官・朝香宮鳩彦王中将 参謀長・飯沼守少将 参謀副長・上村利道大佐
第3師団(名古屋、「藤田部隊」) 先遣隊
歩兵第68聯隊(岐阜、聯隊長・鷹森孝大佐)
第9師団(金沢、師団長・吉住良輔中将、参謀長・中川广大佐)
歩兵第6旅団(旅団長・秋山義允少将)
歩兵第7聯隊(金沢、聯隊長・伊佐一男大佐)
歩兵第35聯隊(富山、聯隊長・富士井末吉大佐)
歩兵第18旅団(旅団長・井出宣時少将)
歩兵第19聯隊(敦賀、聯隊長・人見秀三大佐)
歩兵第36聯隊(鯖江、聯隊長・脇坂次郎大佐)
騎兵第9聯隊(金沢、聯隊長・森吾六大佐)
山砲兵第9聯隊(金沢、聯隊長・芹沢透大佐)
工兵第9聯隊(金沢、聯隊長・野中利貞大佐)
輜重兵第9聯隊(金沢、聯隊長・三田村正之助大佐)
第13師団(仙台第13師団の一部、山田支隊)
歩兵第103旅団(旅団長・山田梅二少将)
歩兵第65聯隊(会津若松、聯隊長・両角業作大佐)
山砲兵第19聯隊(聯隊長・横尾闊中佐) 第3大隊(大隊長・行方正一少佐)
※南京戦には第3大隊のみ参加
第16師団(京都、師団長・中島今朝吾中将、参謀長・中沢三夫大佐)
歩兵第19旅団(旅団長・草場辰巳少将)
歩兵第9聯隊(京都、聯隊長・片桐護郎大佐)
歩兵第20聯隊(福知山、聯隊長・大野宣明大佐)

歩兵第30旅団(旅団長・佐々木到一少将)
歩兵第33聯隊(久居、聯隊長・野田謙吾大佐)
歩兵第38聯隊(奈良、聯隊長・助川静二大佐)
騎兵第20聯隊(聯隊長・笠井敏松中佐)
野砲兵第22聯隊(聯隊長・三国直福大佐)
工兵第16聯隊(聯隊長・今中武義大佐)
輜重兵第16聯隊(聯隊長・柄沢畔夫中佐)
第101師団(京都、師団長・伊東政喜予備役中将)
歩兵第101旅団(旅団長・佐藤正三郎予備役少将)
歩兵第101聯隊(東京、聯隊長・飯塚国五郎大佐)
歩兵第149聯隊(甲府、聯隊長・津田辰参大佐)
歩兵第102旅団(旅団長・工藤義雄予備役少将)
歩兵第103聯隊(東京、聯隊長・谷川幸造大佐)
歩兵第157聯隊(佐倉、聯隊長・福井浩太郎大佐)
騎兵第101聯隊(聯隊長・大島久忠大佐)
野砲兵第101聯隊(聯隊長・山田秀之助中佐)
工兵第101聯隊(聯隊長・八隅錦三郎大佐)
輜重兵第101聯隊(聯隊長・鳥海勝雄中佐)
師団通信隊
歩兵第10旅団
上海派遣軍直轄機甲部隊
上海派遣軍直轄砲兵部隊
野戦重砲兵第5旅団(旅団長・内山英太郎少将)
野戦重砲兵第11聯隊(聯隊長・浅田弥五郎中佐)
野戦重砲兵第12聯隊(聯隊長・富田富蔵大佐)
独立野戦重砲兵第10聯隊(聯隊長・長屋朝生中佐)
独立野戦重砲兵第15聯隊(聯隊長・街道長作中佐)
上海派遣軍直属工兵部隊
独立工兵第1聯隊(第1中隊欠、聯隊長・小池愛雄工兵中佐)
独立工兵第8聯隊(聯隊長・松井謙三工兵中佐)
独立工兵第9聯隊(聯隊長・織田義重工兵中佐)
独立工兵第12聯隊(聯隊長・吉野義美工兵中佐)

上海派遣軍直屬兵站部隊
第 8 師団第 1 兵站司令部 (長…佐藤八重五郎歩兵大佐)
第 8 師団第 2 兵站司令部 (長…織田三郎歩兵大佐)
第 9 師団第 1 兵站司令部 (長…千田侃次郎歩兵大佐)
上海派遣軍予備馬廠 (長…前川政一騎兵中尉)
上海派遣軍野戦予備病院 (長…宮城篤珍軍医大佐)
上海派遣軍患者輸送部
上海派遣軍第 1・2・3 兵站病院
上海派遣軍第 1・2・3 兵站病馬廠

第 10 軍戦闘序列

司令官・柳川平助中将 参謀長・田辺盛武少将
第 6 師団 (京都、師団長・谷寿夫中将、参謀長・下野一霍大佐、作戰主任
佐藤幸徳、情報主任藤原武、後方主任岡田重美)
歩兵第 11 旅団 (旅団長・坂井徳太郎少将)
歩兵第 13 聯隊 (熊本、聯隊長・岡本保之大佐)
歩兵第 47 聯隊 (大分、聯隊長・長谷川正憲大佐)
歩兵第 36 旅団 (旅団長・牛島満少将)
歩兵第 23 聯隊 (都城、聯隊長・岡本鎮臣大佐)
歩兵第 45 聯隊 (鹿児島、聯隊長・竹下義晴大佐)
騎兵第 6 聯隊 (熊本、聯隊長・猪木近太中佐)
野砲兵第 6 聯隊 (熊本、聯隊長・藤村讓中佐)
工兵第 6 聯隊 (熊本、聯隊長・中村俊雄大佐)
輜重兵第 6 聯隊 (熊本、聯隊長・川真田国衛大佐)
第 114 師団 (宇都宮、師団長・末松茂治中将、参謀長・磯田三郎大佐)
歩兵第 127 旅団 (旅団長・秋山充三郎少将)
歩兵第 102 聯隊 (水戸、聯隊長・千葉小太郎大佐)
歩兵第 66 聯隊 (宇都宮、聯隊長・山田常太中佐)
歩兵第 128 旅団 (旅団長・奥保夫少将)
歩兵第 115 聯隊 (高崎、聯隊長・矢ヶ崎節三中佐)
歩兵第 150 聯隊 (松本、聯隊長・山本重恵中佐)
野砲兵第 120 聯隊 (聯隊長・大塚昇中佐)
工兵第 114 聯隊

輜重兵第 114 聯隊
国崎支隊 (第 5 師団・歩兵第 9 旅団、旅団長・国崎登少将)
歩兵第 41 聯隊 (福山、聯隊長・山田鉄二郎大佐)
第 18 師団 (久留米、師団長・牛島貞雄中将、参謀長小藤恵大佐)
歩兵第 55 聯隊 (大村、聯隊長・野副昌徳大佐)
歩兵第 56 聯隊 (久留米、聯隊長・藤山三郎大佐)
歩兵第 114 聯隊 (小倉、聯隊長・片岡角次中佐)
歩兵第 124 聯隊 (福岡、聯隊長・小堺芳松中佐)
野砲兵 12 聯隊 (久留米、聯隊長・浅野末吉中佐)
工兵 12 聯隊 (久留米、聯隊長・井沢新大佐)
輜重兵 12 聯隊 (久留米、聯隊長・川内益実大佐)
独立軽装甲車第 6 旅団
独立山砲兵第 2 聯隊 (聯隊長・原田鶴吉中佐)
野戦重砲兵第 6 旅団 (旅団長・石田保道少将)
野戦重砲兵第 13 聯隊 (聯隊長・橋本欣五郎大佐)
野戦重砲兵第 14 聯隊 (聯隊長・井手龍男大佐)

日本海軍編成

海軍航空隊
第 1 航空戦隊 (龍驤、鳳翔△艦戦 18▽△艦爆 24▽△艦攻 9▽)
第 2 航空戦隊 (加賀△艦戦 12▽△艦爆 12▽△艦攻 18▽)
第 3 航空戦隊△水偵 30▽
第 1 聯合航空隊 (長・大佐戸塚道太郎△陸攻 44▽△艦戦 12▽)
第 2 聯合航空隊 (長・大佐三竝貞三△艦戦 24▽△艦爆 24▽△艦攻 18▽)
支那方面艦隊
第 3 艦隊 (司令長官・長谷川清中将、参謀長・杉山六蔵少将)
第 11 戦隊 (近藤英次郎少将)
上海海軍特別陸戦隊 (司令官・大川内伝七少将)
第 4 艦隊 (司令長官・豊田副武中将)

以上が、南京攻略戦における我軍の戦闘体制であつた。

(続)

硫黄島における 遺骨収集を体験して

令和6年度硫黄島戦没者遺骨収集
第4次派遣団員 宮崎 泰樹

1 遺骨収集行動の概要

令和6年度硫黄島戦没者遺骨収集派遣団(第4次)に大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会を代表して、令和7年1月28日から2月13日までの17日間参加してきました。

派遣団員は日本遺族会、硫黄島協会、隊友会等総勢42名で、航空自衛隊入間基地から3時間の飛行を経て硫黄島に到着しました。17日間雨はほとんど降らず本土は寒波でしたが、硫黄島の平均気温は約20度であり、比較的過ごし



令和6年度硫黄島遺骨収集第4次派遣団

やすい日々が続きました。

朝は5時起床で、5時半から全員で朝食を取り、7時半から作業を開始。15時半に作業を終了して、その後ミーティングをするという規則正しい毎日過ごすことができました。

今回は、33柱のご遺骨を収集でき、これは最近10年くらいで最も多い収集数であつたと聞いており、本当に良かったとは思ってはおりますが、未だに1万柱が、ここ硫黄島の地下に今でも眠っておられるのも事実であります。

2 遺骨収集の現状

(1) 具体的な遺骨収集要領

硫黄島の遺骨収集は、昭和27年から始まり、現在まで72年間継続しており、硫黄島全体をメッシュ化して、計画的に遺骨収集を実施しています。このメッシュは、硫黄島を攻撃した当時の米軍が硫黄島全体を砲撃するために作成したもので、遺骨収集団はこの当時の米軍メッシュを遺骨収集のために、現在も活用しています。

これまでの遺骨収集は、地下壕の中とその近辺を主体に実施しており、今回我々のチームが担任したのは、地下壕の近辺でした。具体的な要領は、民間企業が機械力で当時の地表面付近までを掘削して、掘削時にご遺骨らしき兆候を発見したら、その地域周辺を人力でもって丁寧かつ綿密に搜索するというのが、基本的な収集要領でした。私は、今回が初めての遺骨収集であつ



遺骨収集現場の様子(1)

たので、ベテランの方々のご指導を受けつつ、ご遺骨の発掘作業、発掘した土をふるいにかける作業、発掘したご遺骨を洗浄する作業の3つを担当しました。正直、ご遺骨とサンゴや岩石の見分けがなかなか難しく、周りのベテランの方々や人類学者の先生達にご意見を伺いつつ、ご遺骨発掘作業を実施しました。

今回は、地下壕の中の作業はなく、地下壕近くでの作業のみでしたが、地下壕内での収集経験がある方も多くおられ、お話を聞くと、地下壕内の作業はとにかく熱く、20分程度が作業の限界であり厳しい作業であつたとのことでした。

(2) ご遺骨の発見状況と人類学者の洞察力から見た戦闘様相
ア ご遺骨の発見状況



遺骨収集現場の様子(2)

(ア) 同じ場所から32本の歯を収集
収集3日目の午後でしたが、塹壕跡の壁1平方メートルの場所から32本の歯が収集されました。ご遺体の歯が収集されることはそれほど珍しいことではありませんが、ほぼ同じ場所から30本以上の歯が発見されることはあまり例がないとのことでした。

人類学者の皆さん達は、これらの歯の状態や治療痕を見て、「この32本の歯は、3人のご遺体の歯ですので、このあたりを丁寧に掘削してください」と発言されました。我々は、4人チームでこの場所を小さなシャベルで丁寧に掘削したところ、ここから先生達が述べられたとおり、3体のご遺骨を収集することができました。

(イ) 鉄帽の中から発見された頭蓋骨

イ 人類学者の洞察力から見えた戦闘様相

収集7日目の午前中のことですが、1つの鉄帽が土の中から発見され、その近辺からご遺骨のほぼ全体が発見されました。ただ、どうしても頭蓋骨だけは発見できませんでした。これだけ全身のご遺骨が発見されたにもかかわらず、頭蓋骨だけが発見できないのはおかしいということになり、更に丁寧に近辺を搜索したところ、やはり発見できませんでした。すると、鉄帽を整備されていた方から、「鉄帽の中に頭蓋骨が張り付いている」という衝撃的な発言があり、一言言葉を失いました。爆弾の破裂で頭蓋骨が鉄帽の底に張り付いていたのです。改めて戦場の厳しさを痛感しました。



ご遺骨を遺骨収集現場から宿舍に収容

(ア) 海岸付近の前進陣地

海岸付近から2体の全身の遺骨が発見され、人類学者の先生達はこれらを丁寧に接合されてご遺骨の全体像を点検されたところ、1体のご遺骨は、右大腿部と右手首が骨折しており、もう1体のご遺骨も数か所の骨折が確認されました。

人類学者の先生からの説明によれば、この2つのご遺体は、2体が重なって亡くなっており、おそらく2体一緒に陣地の壁にぶつかり骨折したもので、たぶん強い爆風が原因であったのだろうとの見解でした。このように、ご遺骨の骨折状況から、当時の壮絶な戦闘様相を垣間見ることができました。

(イ) 火焰報謝機による損耗

今回は、火炎放射器によって損耗したご遺骨は発見されませんでした。が、人類学者の先生から火炎放射機により損耗したご遺骨は、黒く変色するのではなく、より真っ白になり、それは地下壕の中で多く発見されたとの説明を受け、改めて壮絶な戦闘様相が臉に浮かびました。

3 硫黄島戦跡から感じた壮絶な現地の死闘

(1) 摺鉢山から見た栗林師団長の防御構想

日曜日は休養日であったので、最初の日曜日は摺鉢山へ登り、硫黄島全体を見ることができました。摺鉢山の頂上からは、硫黄島の地形状況がよく見



元山方向から見た摺鉢山

えて、日本軍の防御構想や米軍の攻撃構想を追体験させていただきました。

栗林兵団が硫黄島に進出された1週間後の1944年6月15日に、米軍はサイパン島に上陸して、ここを3週間で攻略しました。米軍は上陸前に3日間にわたり、1万トン以上の砲弾を

水際陣地に打ち込み、日本軍に多大な損害を与え、水際陣地が崩壊したことを確認した後に、強襲上陸を敢行して、短期間に全島を占領したという事実を栗林兵団長は承知され、水際陣地防御を断念されたと言われております。

摺鉢山から見ると島の中で高い地形は、摺鉢山と、島の北半分であり、栗林兵団長もたぶんここ摺鉢山の頂上で、地形全体を見られて、防御構想を立てられたにちがいないと感じました。

主陣地は、地形強固な島中央の元山飛行場南北の線をEBA（戦闘陣地の前縁）として、その北部後方に強度な地下複郭陣地を何層にわたり構築して、島の北半分を面して戦う防御構想を考えられ、ここ摺鉢山は地形的には強いものの、当初から孤立する地域であり、

ここを上陸阻止陣地として活用することを考えられたものの、摺鉢山は最初から孤立する地域なので、活用方法を悩まれたのではないかと感じました。

栗林兵団長が、すべての陣地を接続する全長28kmの洞窟式交通壕を命じられたのは、摺鉢山の将兵の安否を心配されたことも1つの要因ではなかったのではとも感じました。残念ながら米軍上陸時の洞窟式交通壕の完成度は64%の18kmであったと言われており、栗林兵団長が構想された摺鉢山を含んだ山手線のような島内一周の洞窟式交通路は完成しませんでした。

硫黄島では文字通り硫黄が島全体から噴出しており、洞窟内はかなり熱く、ガスや臭気も充満しており、築城工事は想像を絶する厳しさであったと思われます。この厳しさの中で、よく洞窟式陣地とこれをつなぐ18kmにわたる洞窟式交通壕を構築されたことに、改めて敬意と尊敬の念を抱かずにはおられませんでした。

(2) 主陣地における対戦車戦闘

2回目の日曜日は、主陣地があつた内陸部から北部を見てまわりました。その時に米軍のシャーマン戦車の残骸に遭遇しました。それは戦いの中で損害を受けて放置されたものであると思われしました。

日本軍の対戦車戦闘の中核は、ロサンゼルスオリニピック馬術個人障碍競技優勝者である西竹一中佐率いる第26戦車連隊であり、97式中戦車が主力



今も残る米シャーマン戦車の残骸

でありました。ただこの戦車は重量16トンで正面装甲25ミリ、戦車砲口径37ミリであり、他方シャーマン戦車は重量20トンで正面装甲85ミリ、戦車砲口径75ミリであり、その性能は大きな差がある上に、日本側の戦車数は23両に對して、米側は300両以上であつたと言われており、厳しい対戦車戦闘を強いられたものと推察されます。栗林師団長の対戦車戦闘の指針は、「防衛陣地は対戦車戦闘を骨幹とした編成と築城を実施して、初期は戦力を温存し、戦機に投じ重要正面に戦車を移動して戦車をトーチカ方式に運用せよ」というものであつたと言われています。最終的には、この対戦車戦闘で、敵戦車を270両撃破したとも言われており、栗林対戦車戦術は大健闘しました。

旧知の仲である元早稲田大学文学部教授の留守晴夫先生の著書「陸軍中将

栗林忠道と硫黄島戦 常に諸子の先頭に在り」から激しい対戦車戦闘の場面を抜粋させていただきます。

『米軍が上陸して3日後、海兵1個連隊がシャーマン戦車30数両を先頭に島中央部の元山飛行場に進撃すると、

早内政雄大尉率いる独立速射砲第12大隊が迎え撃ち、射程距離まで充分に引きつけ徹甲弾をシャーマン戦車の脇腹に打ち込んだ。驚いた敵の全戦車が停止すると、早内大隊はそれを目掛けて速射砲を撃った。敵は慌てて艦載機に援護を頼み、速射砲の三分の一が爆弾投下で破壊されるが、早内は砲手の倒された砲に駆け寄り、自ら砲手になって撃ちまくった。しかし、敵の集中砲火を浴び、砲は吹き飛び、早内も2メートルも跳ね飛ばされるが、血だるまになりながらも爆雷を抱いて敵戦車に体当たりを敢行、それを見た部下たちは「大隊長に続け」とて、爆薬を抱えてシャーマン戦車に突っ込み、全員が壮烈な自爆を遂げたのであつた。』

米軍のシャーマン戦車の残骸を見ながら、上記の壮絶な対戦車戦闘を思い出しました。

(3) 兵団司令部壕跡にて

最終日の前日に島内の戦跡を廻る催しがあつたので参加しましたが、その際に硫黄島北部にある兵団司令部壕跡へ行くことができました。残念ながら中に入ることはできませんでしたが、以前に入ることがある人々の話によれば、この壕はかなり広く、10数人幹



兵団司令部壕碑



兵団司令部付近の壕内の状況

部達が集まって作戦会議や命令下達等が実施され、栗林兵団長の最後の命令下達も訓示もここであつたとのことでした。

先述した留守先生の著書に、最後の命令と訓示が書かれていたので紹介します。

●栗林兵団長 「全将兵に告ぐる命令」

- 1 戦局は最後の関頭に直面せり。
- 2 兵団は本17日の夜、総攻撃を決行し敵を撃潰せんとす。
- 3 各部隊は本夜正子(真夜中12時)を期し、各正面の敵を攻撃、最後の兵となるも飽くまで決死敢闘すべし。
- 4 予は常に諸子の先頭に在り。

●栗林兵団長の最後の訓示

『ただいまより、兵団は反撃のために出撃する。たとえ草をはみ、土をかじり、野に伏すとも断じて戦うところ、死中目ずから活あるを信じる。ここここに至つては、一人百殺、これ以外にない。』

本職は諸君の忠誠を信じている。私のあとに続いてください』

この訓示後に、栗林兵団長は白襷をかけて壕を出て、軍刀を抜き、攻撃前進中に銃弾が大腿部を貫通して出血がひどくなり、更なる前進は無理であると判断され、「屍を敵に渡すな」言い残し自決されたとのことでした。

このような最後の突撃の状況を体感しつつ兵団司令部壕周辺を歩き回りました。

4 最後に

今回、日本軍の聖地である硫黄島で、ご遺骨を収集し、ご遺骨を洗浄させていただくことができ、また栗林兵団長が考えられた戦術に基づく全般防衛構想や兵隊の皆さんが必死に構築された洞窟式陣地や交通壕を実地に拝見することができ、感無量でした。

17日間に33柱を収集することができましたが、それでもまだ1万柱がここ硫黄島には眠っておられるので、何とかここで壮絶な戦死をされた皆さんのご遺骨を本土にお戻ししなければならぬ、硫黄島は日本人が決して忘れてはならない場所であると、改めて痛感しました。

曾祖父 笠井千秋さまへ

笠井 蓮

はじめまして。

僕はあなたのひ孫にあたります、笠井蓮というものです。

今は西暦にして二〇一七年、皇紀にして二〇七七年。

あなたが中国湖南省で戦死なされた日から、実に七十年以上もの年月が流れました。

未来ではあまり、日本人はお手紙を書くということをしなくなったのですが、このたび大学のほうでその機会に恵まれましたので、突然のことで失礼ながらも、筆をとらせていただきます。

僕は現在大学において、小説を書く勉強というより、小説を書くために様々な知見を広めています。妖怪、動物、震災……と、どれも知識を重ねていくのが満足でしょうがないのですが、中でも僕が興味を惹かれ、いつの日か作品に吞みこませ、世の中に発信、後継したいと思えたのは、まさにあなたが戦った、『大東亜戦争』でした。本を読み、映画を見、自分なりに考えを巡らせて、あの戦争はなんだったのか、我々はどう伝えていくべきなのか、なんてことを日々熟考しています。

そんな僕の様子をみて、祖父ーつまりはあなたの息子ですがーや他の家族

は、「ひい祖父さんが、忘れないでくれ、と導いたんだろう」などと口をそろえて言いますが、実際のところはどうかでしょう？ そうだとしたら、感謝の至りという他ありません。そのおかげで、将来やりたいことが見えたのですから。

将来を選ぶようになった未来の日本。あなたがたが決死で護ってくれたこの日本は、とても住みよい国になりました。

着るものには困りません。食べるものは捨てるほどに余ります。灰塵に帰したあの廃墟は何処にも見られず、多くの国民が温かく涼しい家々に住むことができます。小さな不平不満も声をあげることができ、帝国にはなかった自由もあります。

みんな、七十年前にあった戦争など忘れていきます。初めから平和であったとでも言いたげに。我が物顔で歩いている土地の上に、たくさんの血肉が滲みこんでいることなど忘却しています。好きなだけ使える資源も、共に笑える若者も、夢をみることで膨大な将来も、かつて全てが戦争につき込まれたことなど、頭の片隅にもありません。

しかしながら、偉そうに歴史を知った気になってる僕ですが、最近大学の授業を通じて、「そんなものまで戦争の道具に」と、気付かされるものが

ありました。

それは「星」でした。

現役の軍人さん、しかも当時大学生で、非常に優秀であった方に講釈を垂れるのはいささか気が引けるのですが、戦争には第二次大戦より、航空機が主力として投入されたではないですか。その搭乗者は夜間、星の高さによって自らの位置を知る「天測」によって方角を確認し、目標となる、遠い遠い地へと飛んでいったのです。

天測には、判断基準とでもいうべきものになる「天測表」があったことも学びました。こちらの製作には学徒が動員されたとのことで、同じく学徒出陣によつて徴兵されたひいお祖父様を思い出しました。銃後と最前線の違いは大きいですが、後方にもあなたと同じく、多くの学生が戦争に駆り出されていたという歴史を、また改めて実感することになりました。

加えて、これもまた偶然なのですが、このお話が山梨県の博物館で上映されたものである、ということにも、得も言われぬご縁を感じました。僕の実家は現在長野県にありますが、本籍はひいお祖父さま同様、山梨県のままなんです。ひいお祖父さまも確か、甲府にあった軍から大陸に出兵したと墓石に記録されていましたし（という言い方は失礼でしょうか）、何か不思議なえにしの力を、やはり感じずにはいられません。

さて、授業内で紹介されたその映像

では、「銀河」なる爆撃機が、夜空に光る星の海を、銀翼を連ねて飛んでおりました。それは見ている僕にとっても、きつと搭乗者にとっても美しいものであったに違いありません。しかし「爆撃機」が行く先で行うことは、戦争において合法とはいえず、「殺人と破壊」なのです。つまり我々は、本来人の手が及ばぬ彼方の星々でさえも、同属殺しの道具として使っていたのですね。

無論僕は、その過去を否定することはしません。戦った過去があるからこそ現在、という意味でもそうだし、そもそも当事者でない僕は、何が正義であつたとか悪であつたとか、結論を下す資格がないと思うが故です。僕の祖父も、あなたが中国戦線でいわば「殺された」事に対して、一度たりとも、日中の善悪を口にすることはありませんでした。戦争なんだから、仕方ねえ。ただ、その一言です。

そもそもそんなもの、立場や勝敗が違えば簡単に逆転してしまうものですし、歴史の地層に埋もれすぎて、正否が覆ることだつてしばしばですから。だから僕は祖父のように、過去という現実を伝えることに専念したいと思っています。

あなたが戦つたという現実。日本が戦つたという現実。戦争があつたという現実を。

風化こそさせども、消失だけはさせ

まいと。

正邪善悪の一切は、七十年前のあのときに置いていこうと思います。こんなことがあったんだ。たくさんの人が死んだんだ。繰り返すべきではないんだ。それだけでいいと思います。それが、「過去からしか学べない」くせに、「前にしか進めない」我々がつけられる、折り合いだと思ふのです。過去に縛られていては、いつまで経っても前には、進めません。戦後は、終わらせん。あの戦争は、終わりません。散華していった多くの御魂を、もうそろそろ、休ませて差し上げてほしい頃だと思ひます。

『お星様になった』

亡くなった方に対して、僕たちはしばしばそんな言い回しを用います。

大日本帝国の時代からあったのかは、恥ずかしながら存じ上げませんけれども、この感性に照らし合わせれば、ひいお祖父さまもお星様、ということになりますね。かつて星々は兵器として利用され、兵士として散ったひいお祖父さまはお星さまになりました。旭日があがるまで、夜空を煌々と照らすお星様です。

その光はきつと、天測の星の如く、人々を導く道しるべになることと思ひます。戦火に燃ゆるかつてにはなく、戦いのない、希望の明日へと。そうするべく、そうなるべく、頑張ろうと思ひます。

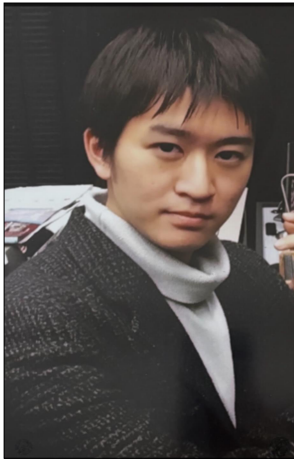
それでは、さようなら。
またお墓と神社へ、参ります。

【編集者追記】

本寄稿文は、当協議会賛助会員の笠井ありこ氏からお送りいただいたもので、ご多息である笠井蓮氏が学徒出陣で戦死された曾祖父にあてて書かれた手紙です。

笠井蓮氏は1996年生まれ。日本大学芸術学部卒業後、声優の養成所を経て声優として一步を踏み出したところで、2021（令和3）年6月24日夭折されました。

大東亜戦争を語り継ぎ、戦没者を慰霊する上で、大きな力となったであろう筆者が早逝されたことは誠に残念ですが、その思いを少しでも多くの方に紹介したく、ご家族の承諾を得て、戦後80年の節目に本誌に掲載させてもらうことにしました。
故笠井蓮様のご冥福を心からお祈り申し上げます。



笠井 蓮

靖國神社永代神樂祭のご案内

永代神樂祭は会員の高齢化等で慰霊祭の斎行が困難になる中、「大東亜戦争全戦没者」を慰霊顕彰するため、靖國神社によって毎年4月28日、永代にわたり祭祀をしていただけるものです。令和8年の神樂祭に参列を希望される方は事務局までご一報下さい。
なお、奉奏日の4月28日はサンフランシスコ講和条約が発効し、我が国の主権が回復した日であり、ご英霊の勇氣と献身を思い起こし感謝するよい機会になると思ひます。



残暑お見舞い申し上げます

公益財団法人 陸修信社

会長 森 勉

理事長 火箱 芳文

副理事長 岩田 清文

専務理事 内田 益次郎

事務局長 本庄 俊弘

公益財団法人 水交会

会長 杉本 正彦

副会長 佐賀 幾雄

理事長 河野 克俊

専務理事 村川 豊

事務局長 徳丸 伸一

航空自衛隊退職者団体 つばさ会

会長 杉山 良行

副会長 丸茂 吉成

副会長 片山 隆仁

副会長 藤田 信之

副会長 谷井 修平

副会長 福永 充史

専務理事 荒木 文博

公益社団法人 隊友会

会長 折木 良一

理事長 岩崎 茂

常務理事 徳地 秀士

常務理事 岩田 清文

常務理事 山村 浩

事務局長 藤井 貞文

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長 藤田 幸生

理事長 岩崎 茂

副理事長 岡部 俊哉

専務理事 石井 光政

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 安倍 昭恵

理事長 山下 輝男

副理事長 石井 光政

専務理事 伊藤 隆

事務局長 國澤 輝生

事務局からの報告等

一 令和7年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の斎行

7月5日(土)、靖國神社において当協議会が参加諸団体と共に挙行した「令和7年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、会員団体・個人をはじめとする皆様のご支援、ご協力を得て滞り無く行事を斎行することができました。

なお、令和8年度の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭は、令和8年7月4日(土)に行う予定です。

二 業務・会計監査の実施

4月28日、当協議会事務所において令和6年度業務・会計監査を受けました。監査の結果、事業は適正に行われており、経理についても異常は認められませんでした。

監査人

・中井 真人(公認会計士)
・山崎 文夫

三 令和7年度第1回通常理事会及び定時評議員会の開催

(一) 通常理事会

5月14日、当協議会事務所において令和7年度第1回通常理事会を開催しました。本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認され

ました。

議案

- ① 令和6年度事業報告書
- ② 令和6年度決算報告
- ③ 役員の選任
- ④ 令和7年度定時評議員会の開催
理事8名及び監事1名が出席

(二) 定時評議員会

5月29日、令和7年度定時評議員会を開催しました。本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認されました。

議案

- ① 令和6年度事業報告書
- ② 令和6年度決算報告
- ③ 令和7年度事業計画及び収支予算書(報告)
- ④ 役員の選任
- ⑤ 評議員の選任
- ⑥ 評議員6名が出席

四 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

令和7年度第1回派遣(7月2日～7月17日)に陸修偕行社から2名が参加され、23柱を収容しました。

五 新入会員紹介(敬称略)

(令和7年4月1日～8月25日)

【正会員】

甲飛喇叭隊

【賛助会員】

ト部 桜子 神山 明 菊池 正通
高柳 登 高市 晴通 多賀 久郎
辻本 直彦 徳永 正 向井 実
賛助会員9名

寄付金の税額控除に係る

領収書等の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されております。

従来、5000円以上の年会費・寄付金を頂いている方に領収書及び証明書(写し)を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、本送付は、12月上旬頃に発送を予定しておりますので、ご了承下さい。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書(写し)をご希望の方は、遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様のお力添えにより成り立っております。

令和7年度年会費未納の方には払込取扱票を「慰霊第65号」に同封していただきますので、年度会費納入の際ご利用いただき、会費納入にご協力をいただければ幸いです。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、有志会員の皆様から寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)
年会費 一口一〇〇〇〇円

(一口以上)
*振込先口座番号(郵便振替口座)
〇〇一四〇・六・三三四九三〇

(当協議会へ事前に連絡をいただければ、振込料無料の振込用紙付「入会しおり」をお届けいたします。)

「令和8年版靖國力レンダー」の紹介

英霊にこたえる会の「令和7年版靖國力レンダー」が頒布されます。

頒布価格は、購入部数ごと下表の通りです。

購入ご希望の方は、購入部数に応じた下表の金額を郵便局（ゆちょ銀行）備え付けの「払込取扱票」を使用して振り込んで下さい。

なお、振込手数料はご本人負担となります。

カレンダーの内容は次の通りです。

●靖國神社と護国神社の写真を中心に、季節感溢れる写真で構成しました。

●英霊にまつわる写真と遺書・逸話等を掲載しております。

●中綴じタイプのカレンダーとなっています。

表紙サイズ A4版
本文サイズ A3版（見開き使用時）

■問い合わせ先
英霊にこたえる会

靖國力レンダー業務室
電話 03 (3264) 4610
FAX 03 (3261) 7415

■申し込みの方法

郵便局備え付けの郵便振替用紙に、左記の記載例を参考にして必要事項

を書き込み送金して下さい。

なお、カレンダー送付先となりますので、**住所・氏名・連絡先電話番号**も忘れずに記入して下さい。

振込先口座記号・番号

0016002170431

ホームページも参考にして下さい。

<https://www.eirenikotaerukai.com/goods/>

払込取扱票		振替払込請求書兼受領証	
口座記号・番号はお間違えのないよう記入してください。 口座記号 00 口座番号 0016002170431 金額 金 額 料 金 備 考 英霊にこたえる会 靖國力レンダー業務室 令和7年度維持会費 口分 ¥ (8年版靖國力レンダー) 送料 ¥ 合計 ¥ ご住所 ご芳名 電話番号 日 附 印		記載事項を訂正した場合はその箇所を訂正印を押してください。 切り取らないでください。 この受領証は、大切に保管してください。 口座記号番号 0016002170431 英霊にこたえる会 靖國力レンダー業務室 金額 金 額 料 金 備 考 おなまえ ご依頼人 (消費税込) 日 附 印 料 金 円 備 考	

靖國力レンダー申込金額表

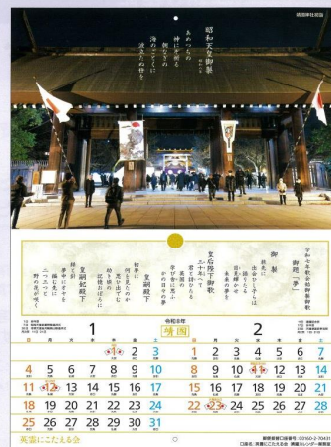
単位：円

部 数 維持会費口数	カレンダ ー 料 金	送 料	合計金額
1	700	300	1,000
2	1,400	350	1,750
3	2,100	500	2,600
4	2,800	500	3,300
5	3,500	700	4,200
6	4,200	1,100	5,300
7	4,900	1,100	6,000
8	5,600	1,100	6,700
9	6,300	1,100	7,400
10	7,000	1,100	8,100
11	7,700	1,100	8,800
12	8,400	1,100	9,500
13	9,100	1,100	10,200
14	9,800	1,100	10,900
15	10,500	1,100	11,600
16	11,200	1,100	12,300
17	11,900	1,100	13,000
18	12,600	1,100	13,700
19	13,300	1,100	14,400
20	14,000	1,100	15,100

令和8年版

「靖國」カレンダー

英霊にこたえる
一億国民のこころを結集しよう



●靖國神社への総理・閣僚の公式参拝を定着させよう
●「靖國神社は、我が国の戦歿者追悼の中心的施設である」
●国家・国民がこそ戦歿者英霊に感謝の誠を捧げよう
●英霊顕彰の国民運動の輪をひろげよう

「靖國」カレンダーを一家に一部掲げましょう



12月 靖國神社初詣



3-4月 御祭神36,600余柱・和歌山県護国神社



5-6月 御祭神55,300余柱・栃木県護国神社



7-8月 令和6年靖國神社みたままつり(提灯)



9-10月 御祭神53,100余柱・北海道護国神社



11-12月 鳳山紅毛港保安堂(台湾・高雄市)

英霊にこたえる会
HP: <https://www.eirenikotaerukai.com>